



3913

高雅余亦別荘

此神遊も常々

此郷念鷹の晩秋

風を吹くや

を拂ふ

下片の昔

其の亦別れぬ

依渡丸を積浜

木一

何事もなく

違申れ

年以來

此の佐渡丸

翻弄

極を破損

約

し有様

船員も

防備も

四十八

か

も始

為

既海

但

の

中

打撲

七名

れ

も

井頭謀叶氏



中程の往來に於て今氏の居る
町に横をり上陸路先分の加藤
氏も今居るものと云ふ何れ道
氣の毒極よるに外れども
七石許り多しの重傷を蒙り
れは旅の力に一人の怪我
と云ふもみづかき候中
室に海風の侵入甚しき暗
燐光を履き見ゆるを見
たも妙にちと申す
一夜歸るに函書書付
都合のちと申す候始に
研究の出版の事

着るの準備は以て又
餐と云ふ事 若くは
おれ候と申す事
其一の始り候事
出申す事
当地の事
人々もは
此れ
申す事
答へ
此れ
先づ
先づ

大正四年十月 野田

市鳴謙吉様

侍中